



俳句雑誌[おき]

6月号

沖 発行所

翼 下

能村 研三

「沖」の記念出版

来年の「沖」創刊四十五周年の記念事業として『沖季語別俳句選集』の刊行が予定され、会員、同人の皆さんから多くの応募があり、目下刊行委員会において編集作業が行われている。

片陰の小さきを縫ひ根津谷中
遠足の列は余さず森に入る

ひたすらに蔵ふことより夏用意

朴若葉触るる二階に住み慣れて

今回の選集には皆さんからの募集句に加えて、「沖」四十五年の句作の歴史も顕彰しようと、先師や林翔先生の作品、さらには「沖」に長く在籍し、亡くなられた方や、主宰誌を出され「沖」を離れた方の作品も掲載したいと準備を進めている。

今までに「沖」は、創刊三周年に『沖俳句選集1』（参加者三〇五名）を刊行したのを始めとして、記念の年ごとに「俳句選集」を刊行してきた。

創刊十五周年の時の第四集では、五三八名が参加し、創刊二十五周年の第六集では、五七五名が参加した。より実作に活用できるようにと、創刊二十周年の時には季語別に編集

五月憂し立ち飲み酒のワンコイン

聖五月翼下の灘は地図通り

清和かな甘き匂ひの洋書棚

端透けしいなか銀座の薄暑かな

桐咲いて水綿密な棚田かな

壹錠が眠り導く夏至の夜

した選集を作ろうと『沖季語別俳句集』を刊行した。この時は六一一名が参加してくれた。

そして創刊三十周年の時は、さらに持ち歩きの出来るハンディサイズの『沖歳時記』を刊行し、七二八名が参加してくれた。結社としての歳時記としては先駆的で、この歳時記を手本に他結社でも歳時記が次々に作られるようになった。

今回の編集に当って今までの選集、歳時記を改めて全てを見てみた。懐かしい人の名に触れることが出来たことと、当時の俳句が今の時代でも見劣りすることのない作品であることに感心した。こうした作品を私が抽出して、今度の選集に入れることにした。

今度の選集は、記念出版の刊行物としては八冊目となり、「季語別」「歳時記」の形では三冊目となる。約一年余の長期の編集作業を経て来年の秋には刊行されることになる。

蒼茫集



山独活

菅谷たけし

雪吊のとれそれぞれの樹の形
恋猫の声のほつれが闇走る
連翹木更津・太田山やもの言ひすぎし口乾く
桜しべ踏めば先師のこゑしたり
山独活やをとこの性の折れ易く
入学の子を東京へ置いてきし

うすみどり

望月晴美

ひとり身のうつし世なべて陽炎へり
産衣のやうや芽柳のうすみどり
観桜皇居や乾通りをしづしづと
もつたいないなこの風は花散らし
春よ 春 東京 駅 は 要 駅
春風や大鷺翔ちさうドームより

春の川

安居正浩

花筵ピザと上司の来るを待つ
春の川渡れば少し年をとる
図書館に居眠り仲間水温む
電柱の傾いてゐる啄木忌
象の背に風ふんはりと花祭
春の雲さやうならとはまだ言はぬ

貝の砂

千田百里

お色東京・丸の内吟行 二句直しの百年駅舎かぎろへる
ビジネス街抜けければ雲居風光る
胡沙降るや隠元は海渡り来し
塔に触れ紙燭のごとき春の月
春闌くる上総掘具の横たはり
惜春の口中にあり貝の砂

陽炎 宮内とし子

巨船危ふし陽炎の中へゆく
号令の世は遠くなり葱坊主
霾ぐもりはるかに見ゆるロシア船
片手より両手の本気潮干狩
捨舟に落花は化粧ほどこせり
行く春の駅のギャラリ―迷路めく

忘れ上手 柴崎英子

雪解一村水音のゆきわたり
春うらら忘れ上手は生き上手
暖かやランニングマシン窓を向き
耕してしづかに余生満たしけり
進級す連続二重飛びが出来
象の耳ぱたりと春を惜しみけり

燕来る 林昭太郎

樹に満つる水こそ佳けれ夕桜
白地図の等高線にみどり差す
切り離す返信はがき鳥雲に
駅前東京駅 三行は千代田区千代田燕来る
風光る新丸ビルに千の窓
春逝くや長き廊下の駅ホテル

赤極む 甲州千草

水音もことばも弾む木の芽時
清明や俯瞰の川のしろがねに
豆の花紐を抜かれて靴乾され
くるくると自動掃除機燕来る
花は葉に東京駅の早呼吸
街薄暑駅の煉瓦の赤極む

竹の秋 上谷昌憲

わだつみのひかりをあつめ竹の秋
東京湾しづもり安房の山笑ふ
タンカーの霞満載して消ゆる
かぎろへど鋸山は屹立す
森閑と墓碑絢爛と落椿
鳴きさうな亀の子束子水温む

百日の雪 池田崇

雪囲解くぶつぶつと縄切りて
雪囲解いて枝葉を梳き直す
踏み固め来し百日の雪を割る
見るだけの妻に付き合ふ雛売り場
雪間草出処不明の新顔も
梅さむし疎らであれば尚更に

五輪のくる街 辻美奈子

春櫛いつも翼は天を向き
若葉風やがて五輪のくる街に
ハングルも英語も添へて首夏の都市
花過ぎのけやかに飯の白さかな
名もなくてただもの芽といふべかり
午後五時のかくも明るし諸葛菜

ご開帳 広渡敬雄

青空に三日月ありし雛納め
清明やニスの匂ひの濃き机
阿蘇山を焼く地球大きくなりにつけり
ぼつかりと亀と伊予石夕永し
たひらかに亀泳ぎをりご開帳
利根川の舟なき春を惜しみけり

蛸 大畑善昭

暖かやにはか庭師の鋸鋏
この地球一番信じゐるは蛸
行者にんにく植ゑて十年後は翁
S Lの吼え復興の春へ発つ
やうやくのさくらさくらや東北も
山桜山にはひそと化仏たち

朝日影 遠藤真砂明

春芝にわが全身の朝日影
大海の春さかしまに天守閣
渡り来し海猫に渚の迎へ波
点滴の一滴づつの花菜晴
時空たつぷり灯台の春惜しむ
磯波に朝日したたる桜貝

喝采 田所節子

合格子またジャズ好きに戻りをり
乾坤の喝采さくら吹雪かな
薫風や輪ゴムで飛ばすグライダー
月おぼろ水惑星の水濁り
亀鳴くや捲ればちぎれさうな古書
菜の花や歩いて若さと戻し

水中翼船 森岡正作

退職の両肩軽し春の雲
春暁の納屋に農具の目覚めをり
白墨で書く文字太く花曇
水中翼船往く春潮を真つ二つ
電子辞書亀を鳴かせてくれまいか
嘶家に酔うて臍を深くせり

ものの芽 細川洋子

雄心の燃え尽きるまで野焼かな
人形の肌をつめたき夜のさくら
レリーフをめぐらせ春色ドームかな
東京駅
永き日の丸の内向く駅時計
研ぎ上げし米のきららか水温む
つらつらの風ものの芽を轆しをり

八重桜 鈴木良戈

春眠の脳内むしろ活性化
日の筋へ浮力増したるしやぼん玉
太き日矢むかし神武天皇祭
北窓全開真上に富士仰ぐ
香り立つ門前町の草餅屋
八重桜夕日重たく揺れにけり

無一物 河口仁志

春田打終へ来し人の大きな手
蝌蚪に足出て水底を歩むかな
青き踏む杖つくほかは無一物
車座に熟女ばかりの花筵
万愚節金の成る木を手入れして
朴咲けり天に師の声あるごとし

花どき 瀨上千津

長寿鯉すむ伏流池冴返る
連翹の古木を咲かせ流瀆めく
孫引の見当ちがひ山笑ふ
類が類よびたる和み花筏
似て非なる書画も愛み小町の忌
大方は亡きアルバムや花おぼる

宇治の堰 北川英子

川の名の宇治の堰落つ花筏
最後かも知れぬ近江や鳥雲に
衣桁より二ひら三ひら花衣
忌を修し桜蔭降る昏さかな
つくづくと世に憚りて春墓参
花散らしの風雨や予報当り過ぎ

直球 湯橋喜美

身の内を過ぐる水音花山葵
しやぼん玉発信もとの見当らず
牡丹に触れては過ぐる風の贅
牡丹切る心に乱れ来ぬうちに
春風と気付く風船帰り来ず
夏隣父直球を浴びどほし

潮鳴集

ねてこそ野原 井原美鳥

なにもかもあいうえお順入学す
仰向けにねてこそ野原初雲雀
登り来し百段の息芽吹き急
池の面の雲に乱れや花吹雪く
ゆふぞらは夜空のはじめ雁帰る

他 人 町山公孝

春光の足場を渡るヘルメット
陽炎や煉瓦の疵にある明治
太陽を背負ふかたちに潮干狩
春風や乳ふくませてゐる堤
桜咲くみんな歩いてゐて他人

駅 舎 峰崎成規

春禽やシャワーせはしく弾く朝
現し身は華やぎてこそ初桜



櫻戸の木目潤す春の雨
東京駅略行二句
あらたなるビルの稜線鳥帰る
乗り降りば駅舎の呼吸若葉風

縄文の水 矢崎すみ子

縄文の水を蔵して山笑ふ
湧水の日のころころと山笑ふ
木の洞にむかしむかしの春を聴く
金縷梅の花や咲くらむ土偶の眼
縄文の岩根に野風雉ほろる

春一番 堀口希望

書齋てふ男の巢穴春一番
老いゆくもよし囀に目をさます
鈴ヶ森刑場ここにかぎろへり
観音の膝下に蛸蚪の国しづか
さくら貝少女は海に返しやる

沖作品



初ひばり授乳の胸を惜しげなく
まつ先に日がのぞきこむ巢箱かな
マシユマロに宥むる小腹のどけしや
増税の春や切手に白うざぎ
春水の草書うねりを跳べば江戸
遠富士や土筆は丈を競ひ合ひ
暖かや歩いてすぐに父母の墓
玉砂利のいろを磨いて花の雨
朝よりの雨に色ます牡丹の芽
一ところ空を切りとる白木蓮
潮目よく見ゆる日和や鳥帰る
堰越ゆる水を豊かに涅槃西風
海光に翼のごとき春シヨール
衣擦れの音のよぎりぬ牡丹の芽
亀鳴くや最年長は淋しきと

長野

植村 一雄

東京

磯貝 尚孝

千葉

多田 文字

能村研三選

野を焼きて産土神を揺り起す
残り鴨人間界に柵みて
瀬戸内に渡る汽笛の早春賦
灯点りて昭和レトロの春の宵
空のバス春灯乗せて発車せり
風を継ぎ歌を継ぐ春西行忌
寺の市春の綻び縫ふやうに
右巻きの螺髪一尺暮の春
沈丁花悟りの門の細く開き
足裏に柔らかき畦揚げ雲雀
刃物屋の暗がりであり立雛
春浅し立子の文字の伸びやかに
鳥交る江ノ島少し動かして
天井の龍が火を吐く花の冷
ぼつぼつと平家落人花に住む

神戸やすを

東京

平松うさぎ

神奈川

神山 節子

沖作品 15句選評

*
能村研三

まつ先に日がのぞきこむ巣箱かな 植村 一雄

植村さんは八ヶ岳山麓の茅野市にお住まいの方。近くには森林体験などが出来る田上山があるのだろう。春になると野鳥のために巣箱架けが行われる。巣箱を利用する鳥は、木の穴や崖のくぼみ、石垣のすき間などに巣を作る習性をもっている鳥。自然の豊かなところよりも、町の中の方が必要とされるのが巣箱である。このような鳥は、日本では約二十種が知られており、雀や四十雀、椋鳥、鶯などである。巣箱は気軽に覗けるように、木の高い所ではなく子供たちが観察しやすい所にかける。まだ新しく木の匂いのする巣箱に日の光が覗きこむように差し込んでいた。

遠富士や土筆は文を競ひ合ひ 磯貝 尚孝

この句、遠近法を見事に使った句と言える。田んぼの畦道や

塊などを歩いていると、この時期は土筆がいっぱい生えているのに出会う。気づかずそのまま通り過ぎてしまうこともあるが、一面に生えていけば、手に持てるくらいはあつという間に採ることが出来る。よく見るとそれぞれが文を競い合っているように見える。そんな微細な世界の向こうには日本の代表的な主峰とも言える富士山が聳え立っている。

海光に翼のごとき春シヨール 多田 文子

春になつてもなお寒い時に用いるシヨール。おしゃれを兼ねた、鮮やかなすみれ色など。色鮮やかなシヨールが本格的な春の到来を待ち望んでいるようでもある。このシヨールを軽く羽織つて、海を見に行つた。春の海光を眺めていると、気持が高まり何かに挑戦する勇気が湧いてくる。雄大な海に翼を持つて漕ぎ出してみたくなる。

野を焼きて産土神を揺り起す 神戸やすを

草原の草は、春から夏にかけての放牧の牛馬や、冬の間の干し草の原料になる。野焼きによって有害な虫を駆除するとともに、餌料の草を育てる。野焼きをやめると木が生い茂り草原はなくなってしまうことがあるそうで、草原の美しさは野焼きによつて保たれている。地域によってはこの野焼きが火振り神事などとして行われることもある。野焼きで産土神が揺り起されてしまった。

(以下略)